

別科日本語研修課程 この一年を振り返って

— 2003年度活動報告及び今後の課題として—

大河原 尚

I. はじめに

別科日本語研修課程(以下、別科)では、2003年度25名の学生を受け入れ、一年間の活動を行ってきた。本報告では、別科でのこの一年間を振り返るとともに、今後に向けての課題についても考える。そうすることで、一年間の活動報告を単なる毎年の年中行事として終わらせるのではなく、少しでも将来の改善につながるようなものとする必要があると考えたからである。

別科に嘱託講師の制度が作られて7年が過ぎた。その間、整備された点もあれば、問題点のまま残されているものもある。また、新たに問題として浮かび上がってきたものもある。その意味で、現在の別科の活動を報告すると同時に、今後の別科にとって重要だと思われる問題を概観してみた。

II. 2003年度活動報告

2003年4月から2004年3月までの間(実質約30週)、毎週月曜日から土曜日まで、三つのクラスに分かれて授業が行われた。以下その詳細を報告する。

1. 学生とクラス編成

学生は25名が一年間在籍し(定員20名)、その出身国の内訳は、

中国：23名(男17名、女6名)、

韓国：1名(男1名)、

バングラディシュ：1名(男1名)。

クラス編成は、4月の授業開始前にクラス分けの試験を行い、日本語のレベルによって3クラスに分けた。各クラスは、レベルの低いほうから、I、II、IIIとし、授業期間中、数名の学生に対しクラス移動を行った。

授業終了時の各クラスの人員は、

Iクラス：9名(中国：8名、バングラディシュ：1名)

IIクラス：9名(中国：8名、韓国：1名)

IIIクラス：7名(中国：7名)

2. 年間活動（学年歴）

- 4月 入学式、ガイダンス
授業開始
- 5月 親睦会
- 6月
- 7月 前期集中授業
前期末試験
前期授業終了
- 8月 (夏季休暇)
- 9月 後期授業開始
- 10月 学部推薦入学の推薦者決定
留学生研修旅行参加（東北地方）
- 11月 (大学祭による休講)
- 12月 交流会
(冬季休暇)
- 1月 後期末試験
後期授業終了
補講
- 2月
- 3月 別科修了者発表
(春季休暇)
別科修了式

3. 各クラスのレベルと授業の概要

〈時間割〉

毎日の授業は、全て必修の科目で、1時限目（午前9：20開始）から3時限目（午後3：00終了）あるいは4時限目（午後4：50終了）まで行われた。但し、土曜日は2時限目（午前12：40）まで。

2003年度 別科時間割

	I 9:20～10:50	II 11:10～12:40	III 13:30～15:00	IV 15:20～16:50
月	日本語演習1	日本語演習2	日本語演習13	
火	日本語演習3	日本語演習4	日本語演習14	日本語演習15
水	日本語演習5	日本語演習6	英語	
木	日本語演習7	日本語演習8	英語	日本事情
金	日本語演習9	日本語演習10	日本語演習16	
土	日本語演習11	日本語演習12		

〈クラス授業〉

Iクラス

目標：

日本語学習経験のほとんどない学生であった。

そのため、まず授業開始時は、日本語の音声を聞いて判別できること、及びその後の別科での授業を考慮しできるだけ早くひらがなを身につけることを目標とした。

主教材（初級教科書）に入ってから、遅くとも前期終了時までには初級前半の文型、文法事項の学習を終えることとした。その間は、初級の中でも基礎的な文型を理解し、運用できることに授業での重点を置いた。

後期からは、前期に学習した文型表現を復習しながら、初級後半の文型表現、及び語彙の習得を目指した。それと同時に、比較的短く既習の語彙、文型を多く使った読解文の練習も取り入れることで、それまでの文単位の学習から、文脈を捉えて文章として理解してくための準備とした。

教材：

「みんなの日本語初級 I、II」

「みんなの日本語初級 I、II 初級で読めるトピック 25」

授業内容：

授業は、嘱託講師 3 名のほかに非常勤講師 2 名の 5 名でリレー式で行った。

原則として、1 時限目を前日までに導入を済ませた課の練習の時間とし、2 時限目を新しい学習項目の導入の時間とした。

また、午後の 3、4 時限目の時間を使って、それまで学習してきた文型及び文法事項の復習、週間試験とそのフィードバックを行い、文法、文型表現、語彙の定着を図った。

一年を振り返って：

学生は全体を通じて概ね積極的に授業に取り組んだが、事前の目標通りに基礎的な文型表現や語彙を習得し、文単位から文章単位で日本語を理解しようとする事ができた学生は、クラス全体の 3 分の 1 程度にとどまった。限られた時間の中で、教員の側で学習させようとする日本語の要素とその学習方法を、学生（特に進歩の著しく現れなかった学生）に理解させることが十分にできなかったのではないかという点は、今後の課題であろう。

担当：大河原（担任）、石井、福嶋、清水、松嶋（報告：大河原）

IIクラス

目標：

日本語学習経験が一ヵ月前後という学生で、音声、文字は一応できる程度だった。

前期は初級の文型表現、語彙の習得を目指し、かなりスピード・アップして進んだ。

後期は、既習文法事項の復習と併行して、初級未習部分の文型表現、語彙を学習し、中級に進んだ。中級では、読解の練習を通して全体的な文脈の中で理解し表現する能力を身につけていくことを目標とした。また、音声教材を通して語彙や表現法を習得し、知識を得るという総合力を高めることを目標とし、最終的には、読む、聞く、話す、書くという四技能がバランスよく習得できることを目指した。

教材：

「みんなの日本語初級Ⅰ、Ⅱ」

「みんなの日本語初級Ⅰ、Ⅱ 初級で読めるトピック25」

「テーマ別中級から学ぶ日本語 改訂版」

「テーマ別中級から学ぶ日本語 ワークブック」の「速読」の部分

「毎日の聞き取りプラス40上、下」

授業内容：

授業は、嘱託講師3名のほかに非常勤講師3名の計6名で、リレー形式で行った。

前期授業

午前：1時限目を前日までに導入を済ませた課の練習の時間とし、2時限目を新しい学習項目の導入の時間とした。

午後：会話はビデオを使用し、教材に添って既習文型の確認と理解、その運用を練習した。

読解は既習文型、語彙を用いた文章を読み、速く内容をつかむことに重点をおいて行った。

復習の時間は、それまで学習してきた文型及び文法事項の復習、週間試験とそのフィードバックを行い、定着を図った。

後期授業

午前：一ヵ月ほど初級の未習項目を前期同様のスタイルで行った。初級教材終了後、中級に進み、1時限目を読解の時間、2時限目を聴解の時間とした。

午後：会話は前期同様ビデオを使用し、既習文型、語彙の理解から、表現する力を付けることを目指した。また、トピックを与え、自分の意見をまとめて述べるという練習も行なった。

読解は、午前で精読をしているので、スキミング練習をした。

その他に、週一度の週間試験による学生へのフィードバックを行った。

一年を振り返って：

学生は一年間よく出席し、楽しく勉強するという姿勢が見られた。特に前期、初級学習時は積極的に授業に取り組んでいて、かなり成果をあげていた。しかし、中級に進んでから、精読を苦手とする学生、或いは中級で用いられる表現の難しさや語彙の増加にアップアップ気味の学生など、多くの考えさせられる点が生じたことも確かである。ただ、クラスがとても明るくて、個性的な学生が多かったせいも、それなりに目標に向

かって励んでいる様子が見受けられた。

担当：清水（担任）、茜、井上、塩田、松嶋、大河原（報告：清水）

Ⅲクラス

目標：

Ⅲクラスの目標は、前期は、基礎力（初級で取り上げられている「文型・文法」の既習項目）の復習、および未習項目の確認、その理解と定着とした。後期は、基礎力をもとに、学部に行って少しでも困らないような「実戦力の養成」を基本的な目標とした。また、学部で行われる授業をかんがみ、各種の読解（中級前半程度の精読力、速読力）やレポート作成など、なるべく実践に役立つような授業を行い、それらを通して、学生が、今後学部で学んでいく上で最低の理解だけでもできることを目指した。

教材：

「みんなの日本語Ⅱ」（一部「同Ⅰ」も使用）

「みんなの日本語初級 初級で読めるトピック25」Ⅰ（一部抜粋）・Ⅱ

「ニューアプローチ中級日本語基礎編」

「毎日の聞き取りプラス40」（一部抜粋）

「テーマ別中級から学ぶ日本語」ワークブック「速読」部分（一部抜粋）

授業内容：

授業は、主教材を嘱託講師3名と非常勤講師3名計6名がリレー式で行い、「読解および漢字指導（後期は速読）」「作文」は嘱託講師が各1名づつ、「聴解」は非常勤講師1名が担当した。

スタート時、初来日した学生たちの日本語学習暦は1名を除いて240時間がほとんどで、多少のばらつきはあったが、平均して比較的同レベルだと見うけられた。また、日本語学校から来た1名は、中級前半終了ということだったが、初級項目の補いをする必要があった。そのため、リレー式の授業では、主教材については、前期はまず初級文法項目の確認と理解に重点を置き、主教材「みんなの日本語Ⅰ」第21課の復習から「同Ⅱ」終了までを行った。前期末～後期初めにかけての初中級移行期には、「みんなの日本語初級 初級で読めるトピック25Ⅱ」を用いて読解をしながら初級文法の復習整理、語彙の増強を行った。後期は主教材に「ニューアプローチ中級日本語基礎編」を用いた。学部に行って少しでも困らないように、ということ意識して、中程度の文章～やや長め文章を精読し中級前期程度の読解力と文法力の養成を中心に授業を進めたが、さらに語彙力増加・トピックによる会話力練習をはかり、各課修了後に「毎日の聞き取りプラス40」および「テーマ別中級から学ぶ日本語」（ワークブックの「速読」部分）から、課に関連のある内容のものを使用した。

リレー以外の個別に担当した各授業では、学部に進学してからのことをかんがみた「読解（前期は「みんなの日本語初級 初級Ⅰ」問題の読解部分および「みんなの日本

語初級 初級で読めるトピック25 I」を使用した読解、後期はスキミング・スキヤミングによる速読力養成)、「作文(作文の基礎力の養成からレポート作成まで)」、および「聴解(基礎力養成から生教材を用いた聞き取りの授業まで)」指導を行った。また、前期は不定期に数回、後期は9回、担任の時間に「日本事情」を行った。その他、午後の4時間目には文型文法の復習、または復習試験及び週間試験、そのフィードバックを行い、文法・文型表現の定着をはかった。

一年間を振り返って：

今年度は各学生間のレベル差が比較的小さかったことと、性格的にまじめでおとなしかったので、年間を通じて比較的焦点を絞った授業展開をすることが出来た。全体的な評価としては、入学当初に比べ、学生たちはおおむね、かなりの進歩が見られたのではないだろうか。しかしながら、これは例年のことだが、進路先が確定してから、一部の学生に遅刻・欠席が目立つようになり、途中から伸び悩んでしまった学生もいた。また、日本語学校で一年学んで来た学生に対しては、少なくとも前期リレー授業の相当部分は、復習にならざるをえず、初級終了後も、その学生は学習意欲がなかなか向上しなかった。こういった問題に対応するために、今年度は作文や速読など他科目で、目標を明確にした指導を行ったところ、それにはかなり意識して参加していたようだった。ただ毎年、Ⅲクラスの問題としてあげられることの一つは、クラス内の学習者のレベル差がまちまちだということである。本学別科では、日本語学校から来た者でも初来日者でも、同じ授業を展開させていかねばならないという事情がある。今年度のように、比較的レベル差の小さい場合でも、日本語学校から来た者とのレベル差はやはり歴然としていた。本人によほど謙虚な自覚がない限り、同じことをもう一度復習させるのは大変だし、指導する側も困難が伴う。この問題は、今後も続くであろうし、別科全体の問題として考えていかねばならないだろう。

授業では特に後期、いろいろインプットする形となったが、まず学生たちに個々の科目の目的と内容を理解させ、学部へ行ってからの授業をどの程度意識させられるかをかんがみ、授業でも常に意識して指導したつもりだった。特に「作文」では、最後に、実際にレポートを書くことがどんなことを体験させた(限られた時間数ではさらに上のことは望めないで「体験」させるだけにならざるをえない)。担任としては当初、こうした科目を行う際、中途半端に感じる学生もいるのではないかと懸念したが、授業の最後に全体の授業評価を行ったところ、学生からの回答は比較的肯定的な評価が出ていた。ただ、終わった段階で振り返れば、リレーの授業で「速読」まで付随させたのは余計だったかもしれない、それよりも、主教材の続編である「発展編」の一部でも触れさせたほうがよかったのかもしれないと反省している。

担当：松嶋(担任)、幸田、小林、杉山、清水、大河原(報告：松嶋)

〈その他の授業〉

前期集中授業

一年間（実質的には8カ月）という短い別科の学習期間を少しでも補うと同時に、前期で学習したことを再度整理し、後期からの学習につなげるために、夏休みに入る直前の7月後半（7月22日からの一週間）、嘱託講師による授業を行った。

というのも、後期に入ると、すぐ学部推薦に関する試験及び面接があり、また留学生研修旅行や大学祭の休講と続き、なかなか集中して授業に取り組みにくい日程となっている。さらに、進路が概ね決まってくると学生自身の学習意欲も低下する傾向がある。その意味でも、前期の比較的集中して学習に専念できる時期に、できるだけ基礎固めをしておくことは重要である。

コンピュータ演習

11月から、毎週火曜日4時限目「日本語演習15」の時間をコンピュータ演習の時間とした。ここでは、学内でのパソコンの使い方に慣れると同時に、日本語入力（ローマ字入力）の練習を行なった。それまで授業やそれ以外で書いてきた日本語の作文をパソコンのワープロソフト（Microsoft Word）を使って入力した。

特に中国人の学生にとっては、日本語の漢字の読みの重要性を認識する機会ともなり、別科としても、そうした問題に対する対応も今後の課題として浮かび上がった。また、パソコンの操作や入力方法について学生間で教え合ったり、コンピューター教室使用のサポートに来ていただいた学園情報センターの方に聞いたりして、授業とは異なる日本語による実際のコミュニケーションの場ともなった。

作文集作成

上記のコンピュータ演習の時間に打った各学生の作文は、一つの冊子としてまとめ「別科作文集 2003」として発行した。これは、学生本人や保証人の他に、別科生が推薦されて進む学部学科をはじめとする学内の各部署に配布され、一年間の別科の成果を学内にアピールする機会ともなっている。

〈試験〉

別科として行った主な試験は、週間試験、期末試験、統一試験の三つである。

週間試験：

各クラス別に、原則として毎週、授業の一環として各クラス担任の嘱託講師が中心となって行った。試験の具体的な目的や意図、内容や形式、フィードバック等については各クラスによって異なり、それぞれのクラス担当教員が一人一人の学生の学習状況を知り、その後の授業を行なっていくための一つの参考資料として利用された。

期末試験：

前後期末（7月と1月）に、各クラスがそれまでに学習した内容について試験が行われた。各担任の嘱託講師が具体的な目的や内容等を決定し実施。その結果は、各学生の成績の参考資料として利用された。

統一試験：

クラスや日本語のレベルに関係なく、全ての学生に共通の問題及び採点基準でもって、年3回（7月、10月、1月）実施した。主な目的は、それぞれの学生の、学生全体の中における相対的な日本語の力を知ること、初級終了レベルの文法、日本語能力試験2～3級レベルを中心とした読解と聴解の内容で行った。

7月及び10月の試験結果は、学部推薦の際の参考資料として利用し、1月の結果は、各学生の、一年間の日本語力の伸び具合を知る一つの資料として利用した。

週間試験と期末試験は、学習した内容がどの程度身に付いているかを見る到達度試験としてクラス別に行われたのに対し、統一試験は、実施時点での日本語力を見る能力試験であった。ただ、点数として出てきた数字をそのまま各学生の日本語の力とはできないものの、試験結果は学生の評価に大きな影響を与えることも事実である。その意味で、試験結果と日々の学生の学習状況などとの突合せを踏まえて、試験問題のさらなる見直しや採点方法の再検討などが必要である。

4. 課外活動

〈茶道体験学習〉（6月）

学内の茶室において、日本語学科の関口伊都子助教授のコーディネートによる別科学生のための茶道体験学習を行った。来日したばかりの別科学生にとっては、貴重な経験になった。

〈親睦会〉（5月）

別科を修了し、現在本学の各学部学科で学んでいる先輩学生を招いて昼食会を行った。外国語である日本語ではなく、母語で、日本での生活、別科での勉強のこと、また学部での大学生生活など、来日したばかりの別科学生が、今後の生活や勉強についてさまざまな情報を得る場となっている。

〈交流会（作文発表と昼食会）〉（12月）

学生全員が、これまで書いてきた作文の中から一つを選び、他の学生の前で発表した。また、少数だったが日本人学生や学部の先生なども、学生の作文発表を聞きに来てもらった。別科の中だけではなく、別科に普段関わらない人たちにも、別科学生の実態を知らせるいい機会でもあった。

その後の昼食会には、5月の親睦会に続いて、別科の修了生も参加して、先輩留学生として関係を深めると同時に、学部での勉強や生活などについての情報を得る機会ともなった。

〈留学生研修旅行〉（10月）

本学国際交流センターが、本学に在籍する留学生全員を対象に参加者を募集して実施する留学生研修旅行に、別科学生も課外授業の一環として全員参加とした。旅行は2泊3日で、行き先は東北地方。関東地域以外の日本を見、日本式のホテルに宿泊するため、

普段見ているのとは異なる日本の一面を知ることができる。また、別科以外の留学生とも知り合い情報交換する機会ともなっている。

5. 修了後の進路 —学部推薦について—

2003年度も、別科修了後、ほとんどの学生は学部推薦制度によって本学の各学部に進学した。この学部推薦制度は、本別科に入学する際の大きな魅力の一つとなっている。別科での成績、出席、本人の希望をもとに推薦者を決め、各学科の事前審査の後、諸手続きを経て、推薦入学が決まる。

本年度の学部推薦制度による別科学生の各学部学科への入学は、

文学部	書道学科 1名、
経済学部	現代経済学科 2名、社会経済学科 2名
経営学部	経営学科 5名、企業システム学科 5名
環境創造学部	環境創造学科 2名
外国語学部	英語学科 1名、日本語学科 4名、
国際関係学部	国際関係学科 1名。

6. 「別科通信」の発行 —保証人との連絡—

別科では、学生の別科における修学が円滑に進むように、2000年度より各学生の保証人に対し、「別科通信」を発行している。別科側から保証人には、学生の出席、学習に関する状況を伝え、保証人側からは保証人の把握する学生の近況及び別科への意見・要望を寄せていただいている。

2003年度は、4月、6月、10月、12月、2月の計5回の「別科通信」を発行した。こうした相互に連絡を図ることで、各保証人に対しては、単なる名前だけの保証人ではなく、学生の勉学や学外での生活により一層の関心を払っていただく一方で、別科としても、各保証人という第三者からの意見や要望を受け、今後の改善を進めていくことが重要である。

III. 今後の課題として

本論集の創刊号において、その時点での別科の現状と問題点について報告した（大河原:1999）。その後5年が経過し、当時指摘された問題点の改善はどの程度進展したのか。また、留学生や別科を取り巻く環境の変化により、当時は気がつかなかった問題も出てきた。そこで、これまでの別科の活動を踏まえ、いくつかの重要だと思われる問題点を、あらためて確認しておきたい。

1. 定員増に関して

ここ数年の別科学生数の推移を見てみると、入管の許可状況などの情勢により、定員20名に対し30名から15名程度の間を上下してきている。その意味では、別科での

現在の教育体制における学生受け入れ能力は30名程度が上限だと考えることができるかもしれない。こうしたこれまでの経緯を踏まえて、来年度から20名から30名へと定員増を行うことになった。しかし、今まで20名の定員を前提とした体制から定員30名の体制に移行することは、別科のあり方にも少なからぬ影響が予想される。ここでは、本学学部への推薦入学制度を中心とした学生の進路をめぐる問題と、入学者の選抜に関する点の二つについて簡単に見ておきたい。

〈学部推薦をめぐる〉

まず、別科の出口、つまり別科修了後の学生の進路に関する問題である。現在では、別科を修了するほとんどの学生が学部推薦制度によって本学の各学部学科に進学している。一方、入学者の方でも、こうしたこれまでの実績を知って、比較的確実なルートで大学進学が果たせることを、本学別科を希望する大きな理由の一つとして捉えているようである。しかし、各学部学科にとっては、推薦制度によって別科から受け入れられる人数には枠があり、別科の学生数に合わせて、その受け入れ人数も変動するというわけではない。定員が増えたことで、現在設けられている各学部学科での推薦受け入れ枠の人数を広げるかどうかという問題は、基本的には学部学科側における問題である。

仮に、学部推薦できる学生数が現状のままであれば、定員を相当数の人数を超えて学生を受け入れることは、これまでの別科の教育方針に大きな変更を迫ることとなる。つまり、誰でも真面目に勉強をしていれば大学進学ができた状況から、どんなに勉強しても確実に何人かの推薦漏れの学生が出ることになるのである。ほとんどが推薦で進学できる現在の状況であれば、いわゆる入学試験のための勉強に重点を置かなくても済むのに対し、別科の一年間の課程の中で推薦できる者とそうでない者を選ぶとなると、どのような基準で、どのような方法を使って選ぶのかということが大きな問題となる。そうなれば、そうした基準に沿ったカリキュラムを編成し直さなければならぬし、選ばれなかった場合のことも考えて入試対策も、カリキュラムに組み込まざるを得ないであろう。別科での選抜を現実的に行うようになった場合、どのような選抜基準を設定すればいいか。現在の別科の学内での位置付けを考えてみれば、それは各学部学科で別科からの学生にどのような能力なり知識なりを進学前に求めているかということになるだろう。別科はあくまでも学部進学を希望する留学生のために事前に日本語能力を養成するところなのである。別科独自のその方向性を決めることは意味のないことになってしまう。

では、学部推薦の枠が広がれば、そうした問題は解消するのだろうか。確かに、そうなればこれまでの別科がそのまま規模が大きくなっただけで、学生の進路という点では問題はなさそうである。しかし、そんなに簡単に各学部学科での推薦枠が広がるだろうか。これまでの学部推薦における各学部学科とのやりとりの経緯を見ると、どの程度推薦枠の拡大が実現されるかは、慎重に考えざるを得ない。ただ、わずかながらでも、これまでよりも多くの学生が別科から学部へ進み、勉学をするということになれば、別科での教育のあり方や学内での役割について、否応なしに関心が向けられることだろう。

〈入学者選抜について〉

もう一つの問題は入学者の選抜についてである。現在の入学者の選抜は、海外からの志願者に対して直接コンタクトできないために、提出書類による審査と在日保証人の面接を行っている。元来、入学者の選抜はより「よい」学生を選ぶために行なわれるものであるが、別科の入学者について選ぶべき「よい」学生というのはどんな学生を指しているのか。その点について、まずはっきりさせておく必要があるだろう。その上で、現実可能な範囲で適当な選抜方法を考えるということになるのだろう。

ここで、別科の目的を考えてみると、やはりその選ぶべき学生の基準というのも、各学部学科が留学生に求めるものが基本になるのではないか。そして、さらに言うなら、学部の側で留学生に対しどのような教育を行おうとしているかがはっきりと示されることが重要であろう。その上で別科で養成できることを差し引いた資質が、別科入学者に求められるということになるだろう。例えば、それは日本語能力なのか、基礎的な学力的知識なのか、思考能力なのか、それとも学習意欲なのか。あるいは、それらのどれを重視するのか。

大河原(1999)では、5年間(別科と学部4年間)を通じての教育という視野の中で別科の教育を位置付けるという点を指摘した。現在の別科の体制内では何ができるのか、また学部側からは別科に対し何を求めるのかを相互に意見や展望を出し合い、具体的な方策を探る努力をする協力体制の必要性を痛感する。

2. 学内における別科の認識・理解

創刊号における今後の課題のところ、学内における別科、ひいては留学生に対する学内の認識・理解を進める必要性を指摘した(大河原:1999)。別科に限ってみてみると、一年間の別科の中で各学部学科の側で、別科の活動に関わるのは、入学者の選抜と学部推薦のときだけである。しかも、別科の学生と接することは全くなく、ただ事務的な手続として関わるに過ぎず、実質的な作業は一部の別科関係者によって行われている。本来の別科の目的からすれば、もっと積極的に別科の活動や教育内容に関心を示したり、注文をつけたりしてもいいのではないだろうか。前項でも述べたように、別科においてどのような教育をするかというのは、別科単独で決められるものではない。今後、各学部学科との連携あるいは協力体制をいかに築いていくのか、そのために別科としては何ができるのかを検討し実施していくことが大きな課題であろう。

3. コース運営上の課題(一年間の課程を前提に)

最後に、別科での教育に関する問題について考えたい。

〈独自教材の作成〉

現在別科の各クラスで使用されている教材は、初級レベルでは「みんなの日本語Ⅰ、Ⅱ」及びそれに付随する補助教材である。それ以後は、各担任の判断によっていくつかの市販の教科書を主教材として取り上げている。しかし、本来教材というものは、それぞれの学生の状況(日本語能力や学習スタイルなど)や授業や学習の行なわれる環境に

よって、その場に合わせて使うものである。確かに教材は何らかの使われ方を前提として作られているが、教育の場に合わせてそれをどう使うかは、使う教師の側の判断次第である。教材や教科書は、実際に目の前にしている学生を教える際の言わばリソース(材料)の一部に過ぎない。どんな教材を使うかということよりも先に、教育現場には、まず学生がいるはずであり、コースとして教育したいこと(目的)があるはずである。

そう考えると、別科の目的や学生(の傾向)に合わせた教材があつてしかるべきである。別科独自の主教材(教科書)を、今後作成して行くことを検討していく必要があるのではないか。中心となる教材を作成するというのはそんなに簡単な作業ではないが、以下のようなメリットも考えられる。

- ①語彙、場面、話題などが学生の生活に関係したものとすることができる。
- ②本学の別科に特化した内容にすることで、教室以外のさまざまなもの(例えば、学内の施設など)を補助的な教材として考えることもできる。
- ③一年間という短期間の教育において、必要な内容や能力に焦点をあてて教えることができる。
- ④日本語教員のそれぞれの能力や特徴をある程度考慮し、教員にとっても教えやすい教材とすることもできる。
- ⑤簡素な仕上げにてコストを抑えれば、学生の教材費の負担も軽減することができる。

ただ、実際に教材の作成を行うには、別科生の普段の生活や学部に進学してからの日本語の問題点などを事前に調査しておく必要があるだろう。

〈教員〉

大河原(1999)では教員に関する問題として、教員間の連絡体制の充実と教員個々の教授能力の向上を支援していくという二点が指摘されている。しかし、現在どちらの点においても目だって改善されたとは言えない。ここで、再度その点について考えたい。

これまでも指摘されてきているように、一年間(実質八カ月)という短期間で学部での勉強のための日本語力を効率的に養成しなければならない。そこで、7年前に嘱託制度が導入された。それ以来、嘱託講師が常時大学にいて、授業のコーディネート、使用教材の調整、学生への対応などを一貫して行ってきた。そのため、各非常勤講師は嘱託講師の方針のもと授業を行うこととなった。この際、両者の間で十分に意思疎通を図り、相互に意見を出し合い最終的には嘱託講師の判断で方針が決まるという過程を経ることが重要となる。しかし、そうした意思疎通が十分でなければ、非常勤講師は嘱託講師の方針を十分に理解しないまま授業を行い、受身的になってしまう。それでは、せっかくの各非常勤講師の能力を十分に生かすことはできない。

また、非常勤講師の間においても単なる進度の連絡だけではなく、具体的に学生の評価や授業のやり方、教材の使い方などの情報や意見の交換なども積極的に行える機会の設定などの体制が必要であろう。

そうした教員間の連携を保障する体制を整えて行くことで、嘱託や非常勤といった立場に関係なく、別科全体として互いに教授能力の向上に努め合う雰囲気も次第に醸成さ

れて行くことだろう。そうなれば、この機関誌『別科日本語教育』も大いに活用されていくことだろうし、それ以外にも、別科として、さまざまな支援活動を行っていくことも考えられる。

〈評価〉

評価のあり方についての議論は、別科においてこれまであまり取り上げられてこなかった。しかしここで注意したいのは、学生だけでなく、我々教える側も同時に評価の対象とするということである。

まず、学生の評価については、学部推薦者を決定する際の資料として複数の評価材料を取り入れてきた。①期末試験、②各担当教員による評価に加え、③全別科生を同一の問題で評価する統一試験及び、⑤同一の学生を担当する複数の教員から、日本語能力以外の、授業に対する姿勢や学習に対する取り組み方などの評価を行ってきた。しかし、こうした評価資料が有効に生かされて各学生の多角的な把握に繋がってきているかという点については、疑問も残る。評価をどのように利用するのかといった観点からも評価のあり方や方法を検討すべきであろう。

別科のコース及び各授業についての評価については、これまでほとんど行われて来なかった。学部では授業評価として受講学生による授業や教員についての評価が行なわれるようになってきているが、各嘱託講師が個人ベースで学生にインタビューしたりアンケートをとったりということはあっても、別科全体として組織的に行われたことはない。

別科の場合、別科生からの評価はだけでなく、修了生からの評価や別科修了生を受け入れる学部の教員からの評価も重要である。また、各非常勤講師からの、嘱託講師のコースや授業運営などに対する評価も重要である。これは、別科のコースがさまざまな学内的な文脈の中で存在していることの反映でもあろう。さらに言えば、こうしたコースや授業に対する評価は、ただ単にコースや授業の改善ということだけではなく、それらを実行する別科生や各学部の教員にとってもこれまでよりもより積極的に別科の教育に関わって行かなければならないという意識付けの向上にもつながるであろう。

〈カリキュラムの整備〉

別科及び留学生を取り巻く環境が変化する中、「別科では何を教えるのか。」という点を再確認しながら、カリキュラムの内容の再検討を継続的行なっていくことは大切なことであろう。また、これまで、入学者の日本語レベルに合わせてその都度決めていた到達目標や教育内容も、ベースとなる目標及びカリキュラムに沿って、別科として一貫性をもって決めていく必要がある。

さて、そうした別科全体を通した目標はどのように設定したらいいか。現在別科の方では、何らかの一方的な想定（例えば、話すことよりも読んで書くことの方が必要など）の下に授業の計画が立てられているのが現状である。しかし、別科本来の目的から考えると、それは別科修了後に進学する学部でどのような日本語能力が求められているか、実際に必要なのかという点に求めるべきであろう。そういうことからすれば、学部との協力が欠かせないのだが、現在のところそうした試みは一切なされていない。また、最

近の、留学生教育の動向の一つとして、「日本留学試験」の導入を機に、日本の大学での学生生活に求められる能力（アカデミック・ジャパニーズと呼ばれている）の再検討をめぐる動きも参考になるのではないか。

では、もう少し具体的な点についていくつか考えたい。

まず、カリキュラムの内容として、目標とするべき能力や知識をそれぞれの進度の段階に合わせてもう少し細かく決めておく必要があるだろう。つまり、仮にそれまでの日本語学習の経験を全く前提としないレベルから始めて、大学での講義を聞いたりレポートが作成できたりするレベルまでを、いくつかの段階で構成される一つのカリキュラムの流れとして考えた時に、それぞれの段階やレベルでどんな知識や能力に教育の焦点を絞り、そこでの学習をいかに次の段階へとつなげて行くかということである。現在、大まかには初級、中級、上級といったレベル分けが使われているが、それらの内容についてもはっきりとした共通理解があるとは言えない。

また、もう一つのカリキュラムの捉え方として、文法、音声、漢字、長文読解、文章表現などと言った学習領域別に考えることも可能である。この点については、大河原（1999）においても指摘されているが、その後の試行錯誤はあったものの改善はあまり見られず、依然として課題として残ったままである。

さらに、カリキュラムと実際の教材や授業での使い方との一貫性も問題にされなければならないだろう。これまで既成の教科書を主教材として使用していると、初級は初級、中級は中級というように、教える側もその教材で取り上げられている内容に引きずられがちである。また、授業での扱い方も、教科書の内容をそのまま教えることが重視され、予め決めた目標に照らして教材を使いこなすということはなかなか難しい。

最後に、毎年入学してくる学生は全体としてのレベルも違うし、個々の学生の学習経験や学習能力なども異なる。比較的小人数での教育を行っている別科にとって、こうした個々の学生の違いに対応した教育が必要となる。しかし、全くバラバラの学生を相手にするというのではなく、一つ別科としての一貫したカリキュラムがあれば、それに照らして、それぞれの学生あるいはクラスがどの位置にあって、次は何をどんな目標に向かって授業や指導を行っていけばいいかの指針を得ることができる。

IV. おわりに

今年度（2003年度）の別科の活動を振り返ると同時に、今後の別科のあり方を考える上で重要だと思われるいくつかの問題点について考えた。別科に嘱託制度が導入され、嘱託講師がコーディネートを担当するようになって7年あまりが経過したが、依然と未解決のまま残された問題もある。しかし、そうした問題を別科単独で解決していくには限界がある。学内全体、特に学部との連携と協力が不可欠なことは既に明らかである。そのためには、大学全体の視点から別科も含めた留学生の意義をどう考え、それをどう生かしていけばいいのか、別科からも何らかの提案あるいは発信が必要なのかも示れない。

尚、本稿において、今年度の別科の活動を振り返るにあたって、Ⅱ、Ⅲクラス担任の清水、松嶋両嘱託講師から各担当クラスの報告をいただいた。

参考文献

大河原 尚（1999）「別科の現状と今後の課題」『別科論集』創刊号、大東文化大学別科日本語研修課程、99－109頁。